

サルトルの『アルブマルル女王』に おける 3 つの執筆作法

ジル・フィリップ

1951 年の秋に着手され、1952 年の秋に放棄された『アルブマルル女王』は、ジャン＝ポール・サルトルが 1951 年 9 月と 10 月に滞在したイタリアの事後執筆の日記となっています。この未完のテキストは私たちのものにまちまちに伝わりました。サルトルが発表したのは、二つの抜粋だけです。1952 年、『オブセルヴァタール』誌の『カプチン修道女の土間』と 1953 年、『ヴェルヴ』誌の『ヴェネツィア、わが窓から』の二編です。それまで未刊行であった長い断章が一卷にまとめられたのは、死後出版として 1991 年です。この企てのふたつめの版は、新たな資料（とりわけまだ知られていなかったナポリ篇）を付加され、2010 年に発表されたプレイアード版です¹⁾。そして冒頭を構成すると思われる草稿の利用が可能になるためには 2018 年を待たねばなりません²⁾。いまだ個人所有のままになっている断片もあります。

この構想は独特なものであり、その基本方針はよく知られています。一方で、ひとつの国をあらゆる側面から、そして断固とした「反・ツーリスト」の観点から考察した本を作ること。もう一方では、意識と身体が現実を把握する仕方を提示することでした。この後者の、「主観的全体化」のアプローチが、前者の「客観的全体化」のアプローチを徐々に追いやり、最後には追いついてしまうように見えるのですが、これはサルトルが作品に統一性を与えるのに苦勞していたからでしょうか、それとも今なお、私たちには不明な一貫した構成上の論理に従ったからでしょうか。いずれにせよ、この企ての明らかな不安定性を和らげているのは、私たちが手にしているページの執筆面での統一性です。それゆえ、こうした文体面での一貫性は強調に値しますし、問う価値があるのです。

プロトコル 日記の作法

『アルプマルル女王』が日記として示されているとするなら、この形式はサルトルの著作のうちで3番目のものになります。『嘔吐』が提供するアントワース・ロカンタンの日記と、数冊の手帳が残っている戦中日記に次ぐものとしてです³⁾。『アルプマルル女王』はノン・フィクションとして示されることから、戦中日記に近い。現実と意識との出会いに多くを割いていることから、1938年の小説に近づきます。だからサルトルは後に、これを「新たな『嘔吐』」⁴⁾として語ることができたのです。しかし多くの面で、『アルプマルル女王』はどちらとも異なります。例えば、『嘔吐』も『奇妙な戦争——戦中手記』も、書く行為を頻繁にテーマ化しています。「ウエイターによって起こされてしまった。うとうとしながらこれを書いている」、「私の後ろにいる三人の猟兵の会話をメモするために中断する」⁵⁾。『アルプマルル女王』にはそうしたものは、ほとんどありません。たしかに予備的作業の記録のひとつが、書く行為への言及を示しています。「私がこれから書くことを誰も信じないだろう」⁶⁾。また作品の冒頭部と思われるページには二箇所そうしたものがあるのですが、それは私たちが読んでいるテキストの執筆そのものよりも広い領域を狙っているようにみえます。「私は書く。それは同じことだ。私は意味をつかもうと試みる」、「これらすべてを見る悪しき意識。良き意識を回復するために私は書く」⁷⁾。もしこの冒頭に続く数百枚の草稿を信頼するなら、サルトルはこの後、私たちが読む本のエクリチュールそのものに言及することはありません。

このディテールは、進行中であった計画の修正の指標となりうるでしょう。また他の同種の変化と関係づけることができるでしょう。書物を念頭に書かれた最初のページは、それに続くページとは他の点でも異なるからです。最近発見されたページにおいては、日記を書いているのは、このあと徐々にそうになっていく、匿名の旅行者ではありません。その名前も示されています。それは著者の名前なのです。「その写真がモロッコの新聞に載った。サブ・タイトルに『サルトル、フェズ来訪』」⁸⁾。日記の筆者は、その先で、あるジャーナリストに質問を許しますが、これは彼が何者かに関し一切の疑念を除くに十分です。「彼は私にイタリアの実存主義者たちを知っているかと尋ねる。私はそうした者がいるとは思わないと答える」⁹⁾。ローマ到着のページに続くナポリ篇で、ジャック＝ローラン・ボストの名前が言及されますが、これ以外の個人の細かな点は、もはや著者の公的人

格を指し示すことはありません。あれこれの細部の背後に著者を認めることはできますが（日記執筆者はさほど背が高くなく、眼鏡をかけており、金がある……）、どの点も著者をはっきりと特定することはないのです。そして私たちが手にしているページを通じて、時折喚起される思い出は作家の公的生活には属していません。それらは大抵イタリアやよその地での過ぎ去った旅への言及なのです。

しかし『アルプマルル女王』が『嘔吐』とも『奇妙な戦争——戦中日記』とも異なるのは、とりわけ、記述上の観点からです。『嘔吐』は、語りの時制として現在を使っているものの、日常の出来事を述べるには概ね、複合過去を（さらに単純過去も）半過去と合わせて用います。これはいちばんよくあり、いちばん予想される日記の作法に応じたものです。それを示すのが、一例として、この小説のもっとも有名なエピソードです。現在形で再現してもかまわなかったように思われるものです。「私は少し背を屈め、うなだれて、ひとり、この黒いごつごつした、まったくの人の手の加わっていない塊を前にして座っていた。それが私に恐怖を与えていた。そのとき私はあのひらめきをえたのである。／私は思わず息を呑んだ」¹⁰。『戦中日記』は『嘔吐』以上に現在形の語りに頼ります。ただし複合過去で、場面を提示することが禁じられているわけではありません。「ブラッスリーの一室で、われわれはビールのジョッキに小便をさせられた。仲間の連中は裸になった」¹¹ など。

イタリア日記は最初の文から、あるのは現在形だけです。「わたしたちの飛行機は緑の絨毯の上を飛んでいく。ところどころで色は濃くなり、栗色の裏地を見せたりする」。過去の時制が現れるのはただ、描写されたり、語られたりするものに先行する状態や出来事を指示するためです。「わたしたち、約30名は空路を旅してきた者ならでは顔をしている。ツーリストを守ってくれる、あの擬態を通じて、ゆっくりと他国へ適応していく時間を持たなかった者たちである。今朝のロンドンにいたときと変わらぬイギリス人、パリにいたときと変わらぬフランス人なのだ」¹²。ここでは、『嘔吐』で時に示されるような、物語が過去形で始められ、現在形で続いていくような構成はありません。「隣の二人は私が来てからずっと黙りこくっていた。だが突然、夫の声が私を読書から引き離した。／夫は面白そうに、謎めいた様子で、『なあ、見たんだろ』。／妻はびっくりして、夢から醒め、夫を見つめる」¹³。こうした構成は、日記的というより小説的なもので、『戦中日記』にもときどきあります。半過去で始められた

描写が現在形で終わることがあります。「枝が、通っていくトラックの幌を引っ掻いていた。私たちは小さな森に入っていく」¹⁴⁾。しかし『アルプマルル女王』にはそうしたものは皆無です。

こうした問いは些細な関心に思えるかもしれませんが、だとしたら、それはサルトルがつねに動詞の時制に置いた重要性を知らないからです。1938年から1945年にかけて書かれ、1947年に『シチュエーション』の第1巻にまとめられた批評にまでそれは遡ります。もっと後では、『家の馬鹿息子』の第4巻に組み入れるために、フローベールの文体の分析において扱うべきポイントを列挙したとき、サルトルは、まず動詞の時制をメモしています。文や隠喩などに先立ってです¹⁵⁾。別の計画表では、文体の問題から動詞の問題を引き離し、動詞に「複数の章」¹⁶⁾を充てることを予定しています。したがって、もっぱら現在形を採用していることは、『アルプマルル女王』の正確なステイタスを明らかにするために極めて重要であると思われます。しかしまず、注意したいのは、日記執筆者がこの点において、『自由への道』の小説家と似た傾向を示したということです。つまりこの連作の最後、1945年の『魂の中の死』の第二部と、同年、『現代』誌に発表された『最後の機会』の最初の章は、過去形での叙述が捨てられ、現在形で書かれています。フランス語では過去形は、前景となるダイナミックな出来事は単純過去か複合過去によって表現され、情報の注釈的な背景は半過去によって表されます。それに対して、現在形は一つしかなく、このようなアスペクトの対立を中立化するので、事象をはっきりと区別したり序列づけたりしません。現在形は、動詞で示すプロセスを時間秩序のうちに登録することはしないので、今と過去と未来とを識別するには十分ではないのです。「今日、浮かれるような理由はまさにないのだ」、「昨晚、目が痛む、自分の仕事を中断する」、「私たちは明日、モールブロンに向けて出発する」¹⁷⁾。

しかし、厳密に言えば、サルトルが、『アルプマルル女王』のうちに用いようとしたのは、このような現在形の柔軟性ではありません。ここでは『戦中日記』とは逆に、現在形は前日に起きたことを語るため、翌日にすることを語るためには用いられてはいません。昨日のことは過去形で、明日のことは未来形で書かれています。現在形の幅広い時間を示す用法、包括的な用法をもちろん別にすれば、行動と状態はここで、その知覚と発話の厳密なまでの同時性として提示されているのです。

3時。にわか雨が、町の北東、ノメンターナ通りの私を襲う。それは鳥たちの怒り。羽毛が舞い、びいびいという鳴き声。天まで舞い上がる黒い羽。静けさが戻ったとき、私は上着を触ってみる。乾いている。すでに薬色の太陽が青鼠色の綿の雲を突き抜けている¹⁸⁾。

水はおとなしすぎる。音がしない。もしやと思って、私は身を乗り出す。空がそこに落ちていた。水はほとんど動こうとはしない。それでもその無数の皺がああ陰気なく聖遺物>を崩すように揺すり、それは間欠的にきらめきをみせる¹⁹⁾。

引用した二つは、生前に発表された断章、「カプチン修道女の土間」と「ヴェネツィア、わが窓から」の冒頭ですが、『アルプマルル女王』のすべて、もしくはほとんどすべてが、時制に関しては同じ作法に従っているように思われます。そしてテキストはこの観察されるものと観察の正確な同時性を絶えず強調しています。「今、果樹園の中を車は進む。海が先にある、木々の間で白くひかる、ナポリが近づく」²⁰⁾。語られている事柄に後からの報告を読んでいる印象を受ける文章は極めて稀です。カプリ篇の数行、ローマ篇のカルロ・レヴィ訪問ぐらいでしょうか……

この観察されるものと観察と発話の同時性の感覚は、さらに他の目印によって強調されます。たとえば指呼的な指示詞（「鳥と鳥のこの感じ取れないほどわずかな距離、この変わることの無い間隔、一条の光がそれらを包めば、その光は思索を思わせる」²¹⁾）、時間の転位語の反復（「直近の過去、おそらくは昨日、もしくはほんの少し前」、「男と女が今、階段を上る」²²⁾）、または出現の提示詞です。ここに～がある *voici* は、新しい事物がこれ *ceci* という仕方で、知覚野のうちに現れたことを示します（「いまの光景がこれだ。ウェスタの巫女たちの池のひとつを囲む映画の撮影隊」²³⁾）、またあそこに～がある *voilà* は、観察中の現実における突然の変化を示します。（「それに、ほら彼はもどってくる。ためらいながら、車道に降り、立ちどまり、また歩道に上がる」²⁴⁾）。こうして、『アルプマルル女王』においてもっぱら現在形が採用されていることに得心がいきます。この時制は本質的に未完了であり（半過去と同様に、この時制は、考察の瞬間において展開している出来事を提示します）、「主観主義的な」歩みに完全に適合しています。そしてこの歩みが、著作の客観面での野心を補完していくことになります²⁵⁾。

『戦中日記』とは逆に、『嘔吐』はこうした、現在形と出来の提示詞を組み合わせた構成をすでに示していました（ただし『アルプマルル女王』とは反対に voilà の方を voici よりも優遇していますが）。しかしサルトルは『嘔吐』では、そうした構成を日記の作法、つまり回想と書く行為の可視化を前提とする作法とどうにか両立させようと試みていました。「このテーブルを、通りを、人々を、たばこの包みを、私がどのように見ているかを言わねばならない。変わったのはそれだからだ。この変化の範囲と性質を正確に決定しなければならない。たとえば、ここにインク瓶のはいった厚紙の箱がある」²⁶⁾。『アルプマルル女王』では逆に、日記の機能を用いることはほとんどありません。日付による区切れは、今の継起を組織化する手段にすぎません。この手立てがないとしたら、テキストはなかば口頭的、なかば内言語的な長いディスコースの様相を呈することになるでしょう。サルトルは最初のセクション、ローマとナポリにおいて、部分的に日記契約を尊重していますが、ヴェネツィアのページでは、これを捨てて、純粋にテーマによる組織化へと向かっていきます。

メモの作法

私たちは習慣から、日記の執筆は、好んでメモの文体の形態をとり、文は短く、時に動詞の省略が伴うことを予想します。「ヴェネツィアのかすかな現実性。ヴェネツィア、ひとつの反射」²⁷⁾。『嘔吐』がこの作法に頼ることは驚くほどわずかなのですが、『戦中日記』において、この作法はよく示されています。しかしおそらく『アルプマルル女王』の場合以上に²⁸⁾、『戦中日記』ではきわめて異なる叙述の部分を腑分けしなければなりません。とりわけ分析的箇所においてはそうです。フローベールの文体に関する手帳Ⅲのページは将来の執筆のためのメモとして示されていますが、一方、本来性をめぐる手帳Ⅸの冒頭はすでにしっかりとした論述になっています。まさしく日記的な文章に関しては、セクションの始まりや執筆者が主題を変えるときに、動詞のない部分が現れることがよくあります。それは大抵、タイトルの価値がある、枠組み的な、そして/もしくはカンフル剤的なメモです。これは新しいテーマや新しい展開を導入するものです。「歩兵。昨日のおかしな夕べとおかしな印象」²⁹⁾。すべての場合において、たんに素早さと省略の論理に従うことが肝要であり、こうしたミニマルな構文の形態を表現面で活かすことは問題になっていない印象です。しばしば、過去形や受動態の動詞表現、またある種の属詞表現におい

て主語と助動詞 (j'ai / je suis) の部分が省略され、過去分詞だけが書かれることをその証拠と見なすことができるでしょう。『『人間の条件』の再読開始 Commencé. マルローの文学技法と私ののが兄弟のように似ていることにいらだつ Agacé』³⁰⁾。こうした表現の省略は『アルプマルル女王』にはほとんどみられません。たんに過去形がふさわしくないからではありません。すでに述べた理由からでもあります。

その性質以上に、その頻度によって、メモの構文はこの2つの著作のうちで異なります。『戦中日記』の中でさえ、『アルプマルル女王』の多くの箇所ですべて典型的な展開である次のような場面を見つけるのは困難です。「30のテーブル、6人のウエイター、10人のミュージシャン。客はひとりもない。私に注がれる16対の熱い目。私は逃げ出す。公園、無人だ。遠くに一条の光、人がいる」³¹⁾。こうしたケースでは、動詞を欠いた^{セグメント}部分は単に存在の述語付与に相当します³²⁾。そしてこの点描法が観察者による現実の漸進的な知覚についていくのです。知覚対象の継起のみならず、知覚意識の異なる水準を、前反省的意識と反省的意識の異なる水準を分析することも必要です。ここには、必要な変更を加えれば、前反省的意識と反省的意識との間の変化に対応するグラデーションがあります。前反省的意識に対応するのはとりわけ不定冠詞を持つ名詞からなる部分です（「壁龕に、とある聖母」³³⁾）。複数形も頻出（「いく人かのせむし」、「いくつかの明るい店々」、「いくつかの酒場」³⁴⁾）。そしてとりわけ冠詞を欠いたもの（「奇妙に下がっていく道々」、「群がっている人たち、笑い声」、「ボンボン、パティスリー」³⁵⁾）。反省的意識には、数はずっと少ないが、定冠詞のついた独立した名詞グループが対応します。こうしたものは執筆に先立つメモの草稿にとくに現れます（「汲み取り屋なるもの」³⁶⁾）。こうして、これらの指示作用の水準の組み合わせによって、サルトルは興味の知覚的行程を、漠然とした印象から注意深い観察の対象まで、示すことができるのです。「群衆、岸壁にはいくつもの船、戦艦。海のただなかのばかげた壁」³⁷⁾。冠詞なし、不定冠詞、定冠詞はすなわち、漠とした知覚、それよりはっきりとした知覚、十全な知覚なのです。

数多い箇所で、ピリオドの後の追加が、推論の漸進的な組み立てをもたらしめます。「貧しいものたちには愛が必要だ。友情ではない、愛だ。あくなき、血を流す寛大さだ。満ち溢れる聖なる心だ」、「彼らは子供たちに話しかける。小さな死刑囚であるかのように」³⁸⁾。『嘔吐』にも同様の追加がありますが、『日記』の場合と同様にきわめて稀です。「(……) これが

最もシンプルな解答だ。最も不快でもある」³⁹⁾。ピリオドで一旦閉じられたようにみえる構文が再び開く、こうした構成の増加のうちに、「声のエクリチュール」に向かう変化を認めたくなくなります。これは1950年代の散文に顕著で、自然に出てくる言葉の展開とリズムを写し取ろうとするものでした。確かに、二人称の印は、個人の日記に現れるものではありませんし、実際、『嘔吐』や『日記』においてはほとんど存在しないのですが、ここでは多数みられ、別のありふれた口頭表現と組み合わせられています。「ナポリの赤。まあ認めよう。だが、むしろナポリはバラ色と緑色だとみることになろう。もちろん赤い家並みはある。とくに広場に面して。王宮、ダンテ広場のいくつかの家。しかしもしあなたがナポリの赤をご覧になりたいのなら、ニースで、マレンゴ広場を散策されたい」⁴⁰⁾。

他の面で、『アルプマルル女王』のメモ的文体は、サルトルが『自由への道』のなかで大きく稼働させた内的発話の表現モデルに当然近づきます。ここでサルトルは、例えばロカンタンの日記に挿入された内的独白において、すでに顕著だった言い回しを頻繁につかっていました。これは語句をそれだけで発話し、後でまた組み立てた文の中で繰り返すものです。「家々。私は家々の間を歩く。(……) 男。このご立派な男は現実存在する。(……) 歩く、私は歩く(……)」⁴¹⁾。こうした言い回しは『アルプマルル女王』で苦もなく見つけることができます。「誰も。このつつましい祭りに誰もいない。すべて不吉。すべてを食らう夜、廃墟」,「ラグーナ。夜の穏やかな灰色のバラ色の霧。ラグーナ。もはや黒々と」,「ゴンドラ。ゴンドラなるものは、まさしく棺である」⁴²⁾など。しかしヴェネツィア篇に内語的色彩がよく認められるとしても、この著作の他のところでは話者の内的ディスクールを前にしているという感覚は結局のところほとんどありません。それに細切れの構文はそれだけでは——例えば、意味論的ないしディスクールからの他の指標がないなら——読解のこうした可能性を許すに十分ではないのです。

この細切れの構文は、さまざまな形態をとるので、そのすべての型を取り上げることは問題にならないでしょう。すでに考察したものに加えて、最も頻繁に繰り返されるものから二つだけ、扱います。ひとつは、今見たものの展開であり、一つもしくは複数の「未決の主格」によるものです。これらは叙述にテーマの枠組みを与えつつ、それらを文法構造のうちに統合しません。「沈黙、冷やかさ、欠落：銀行の観念的な荘重さが17世紀の陰鬱な偉大さと結びついている」⁴³⁾。もしくは、たんに緩い照応の結び

つきによってミニマルに（「サンマルコ広場：もし私が総督^{ドージェ}ならば、鐘楼を取り去るのだが」，「小さな庭々，イチジク，バラの木，木の上に一羽の雌鶏，石の中庭だ」⁴⁴⁾）。

着目すべき細切れの構文のふたつめもまた，すでに着目した構成と合わせて考察すべきです。これはコロンの（：）を，文法的にきっちりした言い回しの代わりに用いるものです。コロンの右側の部分と左側の部分を結ぶ関係はたんに同格的なものです。「スポンジ状の固体：液体成分による固体の＜支配＞のケース」，「ローマの匂い：乾燥して，深みのある，香りゆたかな，セージ」⁴⁵⁾。どのケースも論理的な，多くはたんに仮説推論的なニュアンスが加わります。「古めかしい，閉ざされた門：使用禁止」⁴⁶⁾。しかしこの関係はさらに多くの価値を持ちえるので，それを網羅するのは難しいでしょう。例えば，左の部分が右の部分の枠組みの役を果たします（「朝のカナル・グランデ：ひとりの少女が洗濯物を絞る」），その逆，（針のような陽を浴びて：朝から晩まで），左側が右で指定されるテーマをアスペクト化することがあります（「水たまりに黄土色，緋色，クロムイエロー：はがれた表皮のマリネ」，その逆，（「隠されている陰気な庭：二つの段が，水に叩かれている，柵，黒く，濡れた地面が分かる」⁴⁷⁾）。とはいえ，この分類は説明になっている例をよく説明しているわけではありません。そもそも，これらはコロンによる連結が可能にする価値のうちのいくつかでしかありません。しかしこれらは，現実の表象がここでたんに知覚のメモに対応するのではないことを十分に強調しています。ここにはつねに知的な過程の喚起が伴っています。また『存在と無』において長く展開された考え，現実には私にまず性質の集まりとして与えられるという考えも結びついています⁴⁸⁾。

類推の作法

知覚の表象が『アルプマルル女王』の「主観的＝客観的」⁴⁹⁾ 企てにおいて中心であるのは，まさしくここで，意識とそれを囲む世界との関係が問題になっているからです。事実，このテキストの読解には，すでにみたように，『存在と無』でこの点に関して主張された，いくつかの立場を想起するのが役立ちます。それに，『アルプマルル女王』のエクリチュールと哲学書の例示のための寸劇のエクリチュールとの比較もなされています。これも故なきことではありません。この例示のための劇も現在形で示され，主観性のこの瞬間を舞台に上げ，指呼詞，転位語をつかっているの

すから、「いまやここにピエールが現れ、私の部屋に入ってくる」⁵⁰⁾など。しかしここでの現在是非時間的です。虚構は経験の分類を指し示しています。虚構はそれ自体としての価値がないのです。書く行為（エクリチュール）はここで全く別のものです。＜私 je＞は書き手とは違います。それに書き手は一般に＜私たち＞によって自分を示します。逆に『アルプマルル女王』では＜私＞は抽象的な主体ではありません。その経験は直接的なイタリアの現実深く刻み込まれています。もちろん、このことでテキストに明白な哲学的な野心を否定するわけではありません。それはとりわけヴェネツィア篇において、個別的には意識のアナログンとしての水についての省察において明らかです。しかしこの思弁的な次元はおおむね抑えられています。広く表象的なものであった当初の野心を殺さないためです。このテキストが掲げた挑戦とは、全く独自の現実の客観的な描写、同じく独自な一個の意識によるこの現実の把握を分節化することなのです。

しかしさらに『アルプマルル女王』を年代的にはもっとも近い時に書かれた『聖ジュネ 演技者と殉教者』と比較するのは裨益するところが少ないでしょう。その根本的な違いにも関わらず、この二つのテキストはあらゆる次元で結びついています。それにサルトルは両者をエクリチュール的一体性のものと考えていました。これらすべての結びつきのうち、私たちがイタリア日記のエクリチュールをよりよく分析するためにとくに手助けとなるものがひとつあります。ジャン・ジュネが1944年に発表した小説、『花のノートルダム』の一節についてサルトルは次のことを記しています。「チュール、ガーゼ、レース、ヴェールが＜彼の視覚をずらす＞。覆われ、ぼんやりとかすんだ知覚は、自らを回想として示し、レミニサンスへと誘う（……）」⁵¹⁾。問題は結局、サルトルが1953年に発表した第二の断章（「ヴェネツィア、わが窓から」）の頂点となる、現在をめぐる瞑想と同一です。「私は知覚しているのか、それとも私は思い出しているのか」⁵²⁾。冒頭から、この著作はこの回想の知覚への寄生をテーマとしているようです。「（……）バルコニーの角で、二人の女が針仕事をしている。貧しい身なりに見える。彼女たちの背後の部屋は暗い。スペインの印象。私はそれを払いのける。こうしたものは場所を取り違えた印象だ。女が、マンティエラを被っているせいだ」⁵³⁾。

この現象に、サルトルは1927年ソルボンヌに提出した修了論文^{メモワール}で、多重知覚 *surperception* の名前を与えていました。このときサルトルは個人的な経験からの二つの例を示しています。ひとつは、自分の腕時計の青が

「6月のある日の、サクレ＝クール寺院の上の空の青」⁵⁴⁾を喚起した日の例．ところで、このタイプの印象は『アルプマルル女王』で常に喚起されています．「ローマは今朝、エディンバラの狂熱の光に照らされる」⁵⁵⁾．第二の例にはイタリア日記の中にさらに直接的な反響があります．サルトルは1927年にこう書いていました．「クリニャンクール通り〔パリ18区モンマルトル〕は、急坂でその家々の先に空をみせ、低い位置の歩道から見上げるとき、私にアルカシヨンの一陣の風を届けてくれる．私は天辺しか見えない通りの先では海が見られるのではと期待してしまう」⁵⁶⁾．25年後、サルトルは『アルプマルル女王』の発表された第一の断章〔「カプチン修道女の土間」〕の冒頭で次のように書いています．「ヨーロッパでもっとも美しいのは、バルベス大通りから見るロシュシュアール通りである〔パリ9区．北駅近く〕．頂きの向こう側は海があるように思えてしまう」．多重知覚はここでは、二重です．つまり、ローマの北の坂道は、サルトルに海のイマージュを喚起したパリの北の坂道を喚起させています．サルトルはアナロジーが広がるままにします．雨は「波しぶき」となり、高いところから見たローマは「海に浮かぶ小舟」⁵⁷⁾を喚起させます．

多重知覚という用語はサルトルの哲学著作にはもはや、現れないにしても⁵⁸⁾、このテーマは彼の著作に神経のように広がりました．しかし『アルプマルル女王』は『嘔吐』のパースペクティヴとロカンタンの苦悩をいわば反転させます．「私は自分の回想を自分の現在によって作る．私は現在のなかに投げ出され、遺棄されている．過去、私がそこに戻ろうとしても駄目だ．私は逃げられない」⁵⁹⁾〔とロカンタンは記していました〕．イタリア日記は再びこの問題を立てます（とりわけ、『ヴェネツィア、わが窓から』が示す現在についての長い瞑想において）、しかしこの問題をそらし、解消しています．つまりすでに見たように、現在の徹底性は、書き手が把握する現実との厳密な同時性を喚起することを狙っているのですが、イタリア経験の基礎は、意識にとって、あらゆる時代の共存、さらにはその同時性の明証なのです．これがローマについての旅行者の最初の印象でもあります．「長距離バスは古代の平野を横断して、私たちを運んでいく．水道橋、麦畑、2000年の熱気．アッピア街道．古代ローマの平野を通して、バロックのローマへと入る」．このテーマは繰り返され、「ヴェネツィア滞在についてのメモ」が用意していた展開は、「重なる時代：19世紀・18世紀・15世紀とラダーナ」⁶⁰⁾についてです．

1927年の論文において、多重知覚の観念はブルーストのいくつかの文

章の分析を終えるときに、現われています。まさにブルーストにとって、経験は単に現在として私たちに与えられるのではなく、つねに、先行する経験を指示する働きにおいて与えられます。サルトルはその先でヴェルハーレン〔ベルギー出身の象徴派詩人〕の詩句を分析し、隠喩のうちに、多重知覚の文学的表現の特権的な様式を見ていました。ところで、これは『アルプマルル女王』を読むときにおそらく最も強い印象となる文体的選択、すなわち隠喩がいたるところにあることの説明となるでしょう。「カプチン修道女の土間」の始まりを思い出しましょう。「3時。にわか雨が、町の北東、ノメンターナ通りの私を襲う。それは鳥たちの怒り。羽毛が舞い、ぴいぴいという鳴き声。天まで舞い上がる黒い羽」⁶¹⁾。イタリア日記は、このように徹底的に類推的な意識を舞台に乗せています。その感覚的な経験は別の感覚的経験を引き起こすことによるのみ存在するのです。「鳩が放たれる。白く、括られた煙の幕が、渦を巻き、泡立ち、空に身を投げる。まるで逆流する滝のような荒々しさ。血の染みが現れ、広がる。もはや鳩はいない。さよなら滝。汚れたコットン・パッドが残る。血が消え、すぐに緑と赤の不吉な光にとって代わられる」⁶²⁾。

『アルプマルル女王』はこの点でも1927年の論文に似ています。「権利上は、私たちは何も付け加えることなく、外部世界を知覚することができるはずである。実際には、私たちはそこにつねに私たち自身を少し入れている」⁶³⁾。多重知覚は、重なった知覚です。そしてイタリアの風景と都市のなかでの複数の時間の共存は、私たちのもっとも日常的な経験のアナロジーとして現れます。まさにここで、この企ての客観的にして主観的という両立しがたい次元が結びつくのです。

次第にはっきりと示されていき、ヴェネツィアのページの水についての瞑想において頂点に達するこの日記は、このとき巨大な^{エピファニー}顕現となります。その意味は、ジェイムズ・ジョイス以降、批評が与えてきたもので、『嘔吐』のマロニエの根のエピソードがすでに示していたものです。つまりある一瞬において、まったくありふれた^{アブリオリ}な知覚が、本質的な何かを、この本質の性質を問わず、開示するということです。これはジャン・ジュネが「啓示」、「法悦」、さらには「奇跡」と呼んでいたものです。「私は絶対的認識の啓示を得た。私に言わせれば豪華な超然のもとで、針金に止められた洗濯ばさみを見ていた時である。ありふれたこの小さな物体の優雅さと奇妙さが私に現れたのだが、私は驚かなかった」。サルトルは2度、この『泥棒日記』のくだりにもどり⁶⁴⁾、ジュネにおける「啓示」の

テーマに15回ほど触れます。しかしサルトルはここになによりも自己欺瞞のひとつの形を見ます。となると、ジュネの顕現は、「^{イエロファニー}聖なるものの現れ」でしょう。それが経験に聖なる色合いを与えているのです。

しかし1927年の論文はまた、多重知覚のうちに、「美的」経験の基礎のひとつを、おそらくはその主要な基礎を見ていました。というのは、多重知覚を扱った、記憶を論じる箇所では、サルトルは「美的対象」の問題と「美的対象がその背後に何かを隠している印象」⁶⁵⁾という問題に触れているからです。このテーマは『聖ジュネ』で繰り返し、現われます。サルトルはそこで、対象の「過去性」の発見を前にして生まれる「詩的」感情を分析しているのです。

キュラフロア『花のノートルダム』の中心人物が詩的世界の啓示を得たのは、村へ向かう道で、「黒いドレスを着て、白いチュールのヴェールを被った花嫁——霧氷のなかの若い羊飼いのように、粉まみれになった金髪の粉屋のように美しく、まばゆいばかりの花嫁」を目にした日だった。白く粉まみれの、雪のようなこれらの対象は、過去の透明な厚みを介して、自らの今そこにある現実性を表す。板ガラスが世界と意識の間に滑り込んでいる。まるで反省された意識が事物と反省的意識との間に滑り込んでいるように。存在の緊迫性はばやけ、自然は自らを思い出しているかのようだ。/ 他のさらに詩的な対象は、それらの存在そのものにおいて「過去性」の構造を持っている⁶⁶⁾。

『文学とは何か』の有名なくだりを思い出しましょう。サルトルがフローランスという語の「詩的な」扱いを喚起するくだりです。この語は同時に都市「フィレンツェ」と女性と花の観念を持ちます。つまり経験の3つのタイプ、回想の3つのタイプです。サルトルが『アルプマルル女王』のなかで「名前の詩的潜在力」⁶⁷⁾に触れるのは、警戒心、さらには揶揄をもってです。詩人はここでは、「ツーリスト」であり、イタリア日記は『ジャン・ジュネに反論する』*Contre Jean Genet*でもあるのです。私は別のところで、このタイトルにある女王という語そのものが、ジュネから借りられたものであることを指摘しました。サルトルはまさに『聖ジュネ』の内の注釈で、この語が示すのが、女性化した同性愛者であり、現実を自分の「美的」次元に還元する者であると念をおしています⁶⁸⁾。そして、これこそイタリア日記の中で「ツーリスト」に帰せられる態度であり、まさにこの態度から逃れることが問題になっているのです。

しかし、この点こそが謎なのです。テキストは曖昧で、ここで語っているのが、ツーリストなのか反・ツーリストなのか、判然としません。『聖ジュネ』と照らし合わせるなら、『アルプマルル女王』の散文は、泥棒小説家の「偽の散文」とさほど異なるようには見えません。次のような『アルプマルル女王』の記述、「夜が花咲く。それはいたるところに花卉がついた濡れた植込み」は、サルトルが批判した「美的散文」（その例として挙げているのは「夜は光だ」⁶⁹⁾）に属しないとどの点でそう言えるのか途方に暮れるだけです。『聖ジュネ』の他のところでは、関係節を持つ名詞グループの孤立的あり方が、サルトルにはそれ自体「詩的」に見えています。関係代名詞を省いて、散文にせよと。しかし『アルプマルル女王』ではこうした文がよく目につきます。私たちが読むのは「この水は流れない」ではなく、「流れないのはこの水」⁷⁰⁾なのです。

『聖ジュネ』の中で、サルトルが『文学とは何か』で定式化した詩的散文に対する断罪を繰り返してはいないとしても、言語との関係における散文家と詩人を分かち根本的な違いについては再説しています。散文家は、現実を誰かに語るために言葉を用いる。詩人は言葉を言葉それ自体のために、自分のために用いる、と⁷¹⁾。しかし、『アルプマルル女王』の柱である「反・ツーリスト」の企てを知らない読者は、1952、53年に発表されたその断章を見て、一般的名称として「詩的散文」以外のものは心に浮かばなかったでしょう。「水は心ならずも静まり、その無秩序をふるえる重い塊として集める。すでにおおきな青い広がりが出ていく……突然鳩が放たれる。それは恐れから狂ったように飛び立つ空だ。浮き橋は私の窓の下で、軋み、壁をよじ登ろうとする（……）」⁷²⁾。ここに模倣を読みとるのは難しいでしょう……

サルトルはある時、自分は『アルプマルル女王』のなかで、「イタリアを言葉の罟で捕まえ」たかったと語りました。しかしおそらく彼自身が自分の罟にかかったのです。シモーヌ・ド・ボーヴォワールはこの企てに対して手厳しかったのですが、他方で、「ツーリズムを揶揄するという口実で」サルトルがツーリスト的散文⁷³⁾、つまり美的散文、さらにいえば詩的散文、さらには偽の散文を作り出したことを指摘しました。実際、イタリアについての「大部な個別的^{モノグラフ}研究」の形をとり、「歴史的背景、社会問題、政治情勢、古代、教会、ツーリズム」⁷⁴⁾を扱うという全体化の企てからは、ほど遠いところにいます。さらにこの本の最初の出版の時点で、アルレッ

ト・エルカイム＝サルトルはまさしく客観的企てと主観的企ての両立不可能性のうちにこの著作が放棄された唯一の理由を見ていました⁷⁵⁾。

確かにナポリ篇にあるひとつの挿入節が私たちに告げています。「注意せよ。話しているのはツーリストだ。繊細な感覚に気をつけよ」⁷⁶⁾。しかし、これは本当に私たちに向けられているのでしょうか。サルトルは自分に警戒を呼びかけていたのかもしれませんが、いずれにせよ、『アルプマルル女王』の今なお知られていない別の草稿が現れたとしても、この問題に最終決着をつけることにはならないのではないか、と思うのです。

(翻訳：黒川学)

* 本稿は、2018年12月7日に立教大学池袋キャンパスで行われた特別講演「文体を分析する——サルトルの『アルプマルル女王』をめぐって」の講演原稿に追補したテキストの翻訳である。

注

- 1) Jean-Paul Sartre, *La Reine Albemarle ou le dernier touriste : fragments*, Paris, Gallimard, 1991 ; *La Reine Albemarle ou le dernier touriste : fragments d'un livre sur l'Italie (1951-1953)*, dans *Les Mots et autres écrits autobiographiques*, Gallimard, Bibl. de la Pléiade, 2010. 私たちはもっぱら後者を参照し、テキストとページはそれによる。
- 2) J.-P. Sartre, « Fragments d'un journal romain », *Les Temps modernes*, n° 700, 2018.
- 3) このリストにはさらに「マチューの日記」の断片を付け加えなければならないかもしれない。これは『自由への道』のための放棄された準備作業に属し、1982年に『現代』^{レ・タン・モデルヌ}誌に掲載された (n° 434, p. 449-475)。
- 4) *La Reine Albemarle* (2010) の解題 (p. 1494) を参照のこと。このテキストの由来に関するあらゆる情報は、この紹介を参照する。
- 5) J.-P. Sartre, *La Nausée* (1938), Gallimard, Folio, 1974, p. 217 ; *Carnets de la drôle de guerre (novembre 1939-mars 1940)*, dans *Les Mots et autres écrits autobiographiques*, p. 603.
- 6) 執筆のためのメモ *La Reine Albemarle*, p. 816.
- 7) « Fragments d'un journal romain », p. 9-10 et 14.
- 8) *Ibid.*, p. 7.
- 9) *Ibid.*, p. 15.
- 10) *La Nausée*, p. 179.

- 11) 詳細に述べられる検診の場面全体を参照のこと。 *Carnets de la drôle de guerre*, p. 297-298.
- 12) « Fragments d'un journal romain », p. 5.
- 13) *La Nausée*, p. 74.
- 14) *Carnets de la drôle de guerre*, p. 215.
- 15) *L'Idiot de la famille*, t.III, Gallimard, 1988, Annexe, p. 743.
- 16) *Ibid.*, p. 761-762.
- 17) *Carnets de la drôle de guerre*, p. 333, 283 et 378.
- 18) *La Reine Albemarle*, p. 685.
- 19) *Ibid.*, p. 689.
- 20) *Ibid.*, p. 701.
- 21) *Ibid.*, p. 696.
- 22) *Ibid.*, p. 697, 771.
- 23) « Fragments d'un journal romain », p. 14.
- 24) *La Reine Albemarle*, p. 712.
- 25) « Entretiens avec Jean-Paul Sartre » (1974), dans Simone de Beauvoir, *La cérémonie des adieux*, Gallimard, 1986, p. 260.
- 26) *La Nausée*, p. 11.
- 27) *La Reine Albemarle*, p. 795.
- 28) 事実、私たちは議論の煩瑣を避けるため、この報告においては（もちろん分析においてではない）、サルトル自身によって発表された『アルプマルル女王』の文章と、例えば（1951年秋のノート *Quaderno* のような）計画の最初期の段階に属する文章との間の強調してしかるべきであろうニュアンスの違いを中和化している。これらの違いは質的である以上に量的なものであろう。またここでは、1952年と1953年に切り離されて発表されたテキストは、放棄されたテキスト以上にこの書物がその全体において取ったであろう形態への通路になっていることを暗黙の了解としている。
- 29) *Carnets de la drôle de guerre*, p. 315.
- 30) *Ibid.*, p. 648.
- 31) *La Reine Albemarle*, p. 715.
- 32) これはサルトルが、『存在と無』（1943）において喚起している、例の「…があら」 il y a である。 *L'Être et le Néant*, Paris, Gallimard, Tel, 1976, p. 650.
- 33) *La Reine Albemarle*, p. 735.
- 34) *Ibid.*, p. 716, 735, 781.
- 35) *Ibid.*, p. 723, 730, 735.
- 36) *Ibid.*, p. 785.
- 37) *Ibid.*, p. 786.

- 38) *Ibid.*, p. 711 et 718.
- 39) *La Nausée*, p. 16.
- 40) *La Reine Albemarle*, p. 716.
- 41) *La Nausée*, p. 144-145.
- 42) *La Reine Albemarle*, p. 715, 766 et 771-772.
- 43) *Ibid.*, p. 745.
- 44) *Ibid.*, p. 855 et 856.
- 45) *Ibid.*, p. 788 et 845.
- 46) *Ibid.*, p. 776.
- 47) *Ibid.*, p. 858, 802, 683 et 816.
- 48) Voir, *L'Être et le Néant*, p. 222-225.
- 49) « Entretiens avec Jean-Paul Sartre » (1974), p. 260.
- 50) *L'Être et le Néant* (1943), p. 391. 『アルプマルル女王』との比較に関しては、以下を参照のこと。Marielle Macé, *Le Temps de l'essai*, Berlin 2006, p. 186-187.
- 51) J.-P Sartre, *Saint Genet comédien et martyr* (1952), Paris, Gallimard, Tel, 2010, p. 397.
- 52) *La Reine Albemarle*, p. 696.
- 53) « Fragments d'un journal romain », p. 6-7.
- 54) J.-P Sartre, *L'image dans la vie psychologique. Rôle et nature*, mémoire présenté pour l'obtention du Diplôme d'Études Supérieures de philosophie (1927).
- 55) « Fragments d'un journal romain », p. 16.
- 56) *L'image dans la vie psychologique*.
- 57) *La Reine Albemarle*, p. 683.
- 58) サルトルが『想像力』(1936)のうちで知覚と回想との関係という問題に戻るのとはとりわけ、ベルクソンの見解をめぐる議論においてである。
- 59) *La Nausée*, p. 54.
- 60) *La Reine Albemarle*, p. 861.
- 61) *Ibid.*, p. 685.
- 62) *Ibid.*, p. 761.
- 63) *L'image dans la vie psychologique*.
- 64) 以下を参照のこと。 *Saint Genet*, p. 292 et 330.
- 65) *L'image dans la vie psychologique*.
- 66) *Saint Genet*, p. 307.
- 67) *La Reine Albemarle*, p. 773.
- 68) 解題を参照のこと。 *La Reine Albemarle*, p. 1501.

- 69) *La Reine Albemarle*, p. 773 ; *Saint Genet*, p. 446.
- 70) *La Reine Albemarle*, p. 796.
- 71) 例えば以下を参照のこと. *Saint Genet*, p. 611-612.
- 72) *La Reine Albemarle*, p. 698.
- 73) « Interférences », entretien entre S. de Beauvoir, J.-P. Sartre et Michel Sicard, *Obliques*, n° 18-19, 1979, p. 328.
- 74) Entretien avec Ingeborg Brandt (1957), traduit dans Michel Contat et Michel Rybalka, *Les Écrits de Sartre*, Paris, Gallimard, 1970, p. 314.
- 75) Arlette Elkaïm-Sartre, « Présentation », *La Reine Albemarle*, 1991, p. 12.
- 76) *La Reine Albemarle*, p. 701.